

W-4-3

非相主要部の一般化と素性継承の新たな根拠：言語の普遍性を追い求めて*

後藤 亘（東洋大学）ngoto@toyo.jp

1. Chomsky (2015)

- (1) a. 主語と動詞の一致が貧弱な言語の T = 「弱い」 (例：英語)
b. 主語と動詞の一致が豊かな言語の T = 「強い」 (例：イタリア語)
c. 範疇素性を持っていない V = 普遍的に「弱い」

(2) 英語

- a. *[e] speaks.
b. *Who do you think that t_i will leave?

(3) イタリア語

- a. [e] parla.
b. Chi_i credi che t_i partira?

(4) *[C [_α Ø [T_φ [...]]]]

英語の T は「弱い」ので、T の上の範疇 α (‘TP’) の $\langle \phi, \phi \rangle$ ラベルを決めるためには、SPEC-T に ϕ 素性を持った顕在的な主語の DP (ϕ -DP) が必要になる。したがって、(2a) や (2b) のように SPEC-T に ϕ -DP がいない文は悪くなる。(※(2b) は PIC 違反でもある)

(5) [C [_α Ø [T_φ [...]]]]

イタリア語の T は「強い」ので、 α の $\langle \phi, \phi \rangle$ ラベルは T が単独で決めることができる。したがって、(3a) や (3b) のように SPEC-T に ϕ -DP がいない文でも良くなる。

1.1. 不明点その 1：空目的語現象について

(6) [v* [_α Ø [V_φ [...]]]]

全ての言語の V は (英語の T と同様) 「弱い」ので、V の上の範疇 α (‘VP’) の $\langle \phi, \phi \rangle$ ラベルを決めるためには、SPEC-V に ϕ 素性を持った顕在的な目的語の DP (ϕ -DP) が必要になる。したがって、空目的語を許す言語は存在しないと予測するはずである。しかしながら、実際は目的語と動詞の一致が豊かな言語では空目的語が許される。

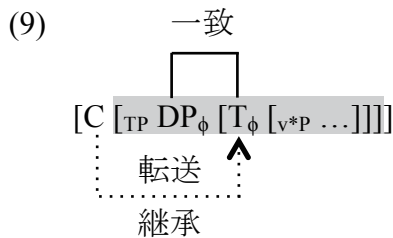
(7) パシュト語 (Huang 1984: 535)

ma [e] wə-xwar-a
I PRF-eat-**OA**_{3.FEM.SG.}
‘I ate (it-Fem)’

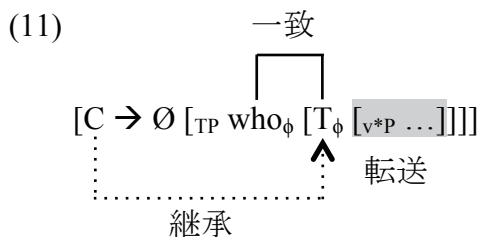
* 本研究は JSPS 科研費 15K16777 の助成を受けている。

1.2. 不明点その 2：素性継承について

(8) Richards (2007)：素性継承は一致と転送を「同じ領域」で行うために必要である。



(10) Who_i do you think *t_i* will leave? (cf. (2b))



一致と転送が「違う領域」で行われている（→素性継承の必要性が曖昧）。

2. 提案

(12) 非相主要部の T と V は範疇素性を持っていないという意味で普遍的に「弱い」。

(13) Chomsky (2015)のシステムと提案システムの違い

	Chomsky (2015)	提案システム
英語などの T	弱い	弱い
イタリア語などの T	強い	弱い
全ての言語の V	弱い	弱い

→ 提案システムは「T の強・弱パラメータ」を排除し、(14)と(15)の仮説を支持する。

(14) (Chomsky 1998: 127)

“optimal design should eliminate such strange and difficult properties as strength”

(15) “Uniformity Principle” (Chomsky 2001: 2)

“In the absence of compelling evidence to the contrary, assume languages to be uniform, with variety restricted to easily detectable properties of utterances.”

2.1. イタリア語（空主語現象）の分析

(16) (Chomsky 2001: 2)

“**parametric variation** is restricted to the lexicon, and insofar as syntactic computation is concerned, to a narrow category of **morphological properties**, primarily **inflectional**.”

(17) 英語とイタリア語の動詞（‘speak/parlare’）の活用（屈折変化）

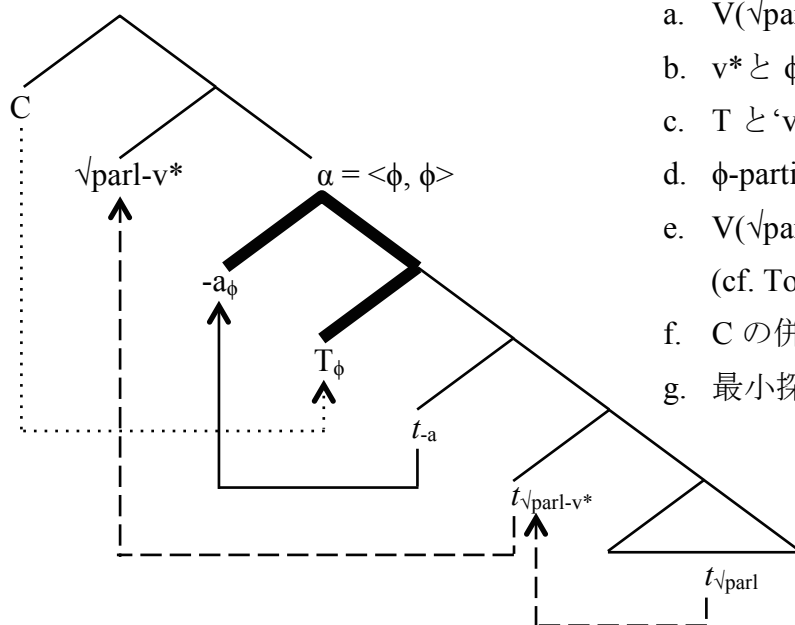
	英語	イタリア語
1 人称単数	speak-Ø	parl-o
2 人称単数	speak-Ø	parl-i
3 人称単数	speak-s	parl-a
1 人称複数	speak-Ø	parl-iamo
2 人称複数	speak-Ø	parl-ate
3 人称複数	speak-Ø	parl-ano

(18) 提案

一致が豊かな言語の動詞は、 \sqrt{V} と ϕ 素性を持った particle (以下、 ϕ -particle と呼ぶ) に分解される。そして ϕ -particle は ϕ -DP と同様の文法的機能を果たすことができる。

(19) 分解 : $\text{parla} = \sqrt{\text{parl}} + -a_\phi$

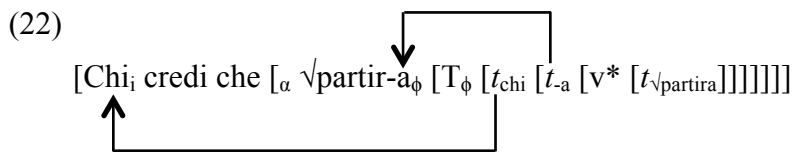
(20) [e] parla. (= (3a))



- a. $V(\sqrt{\text{parl}})$ の v^* への移動
- b. v^* と ϕ -particle(-a) の併合 (cf. t_{-a})
- c. T と ' v^*P ' の併合
- d. ϕ -particle(-a) の SPEC-T への移動
- e. $V(\sqrt{\text{parl}})$ の SPEC-T への移動
(cf. Toyoshima 2001; Matushansky 2006)
- f. C の併合と T への ϕ 素性継承
- g. 最小探査による α のラベル付け

(「.....」 = ϕ 継承 ; 「---」 = \sqrt{V} 移動 ; 「——」 = ϕ -particle 移動)

(21) $\text{Chi}_i \text{ credi che } t_i \text{ partira? (= (3b))}$

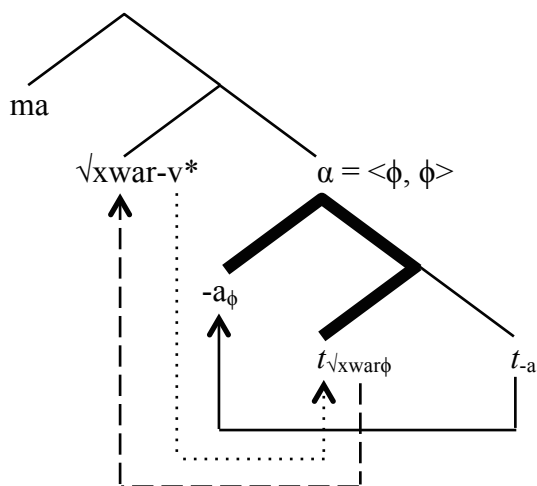


SPEC-Tにある ϕ -particle(-a $_{\phi}$)によって α の $\langle \phi, \phi \rangle$ ラベルは保証されるため wh 主語(chi) はさらに移動することができる (cf. Rizzi and Shlonsky 2007 の“skipping strategy”)

2.2. パシュト語（空目的語現象）の分析

(23) 分解 : $\text{xwara} = \sqrt{\text{xwar}} + -a_{\phi}$

(24) $\text{ma [e] wə-xwar-a. (= (7))}$



- $V(\sqrt{\text{xwar}})$ と ϕ -particle(-a)の併合 (cf. t_a)
- ϕ -particle(-a)の SPEC-V への移動
- v^* と‘VP’の併合
- $V(\sqrt{\text{xwar}})$ の v^* への移動
- v^* から $t_{\sqrt{\text{xwar}}}$ への ϕ 素性の継承
- 最小探索による α のラベル付け

3. 素性継承の新たな根拠

(25) 非相主要部の T と V は範疇素性を持っていないので (=提案(12))、T と V だけでは上の範疇（‘TP’と‘VP’）のラベルを決めることができない。したがって、それぞれの相主要部の C と v^* から ϕ 素性を継承し、一致の対象となる要素を SPEC に併合させることによって上位範疇のラベルを決めることができるようになる。ゆえに、素性継承は、非相主要部の内部特性(12)とインターフェイスの外部特性(26)をつなぐ「架け橋」として必要不可欠なメカニズムになる。

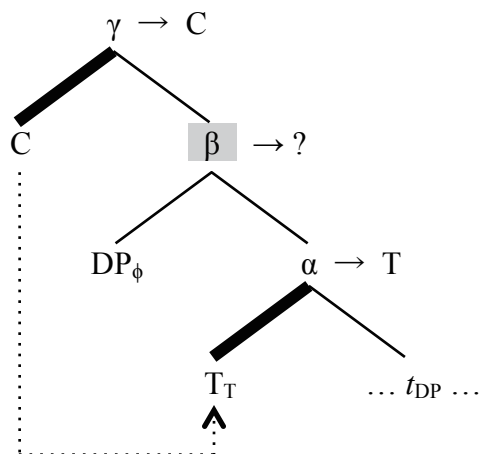
(26) (Chomsky 2013: 46)

“a label is required for interpretation at the interfaces”

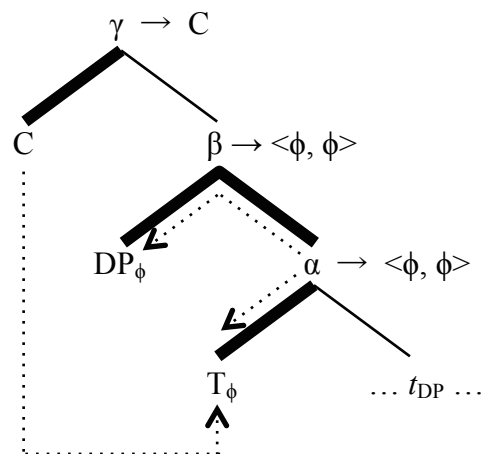
(27) なぜ継承される素性が範疇素性ではなく、一致の対象となるような素性なのか？

(28) 一致素性には「関係」（“relation”）を築く特性が備わっているから。

(29) 範疇素性を継承した場合



(30) 一致素性を継承した場合



(29)のように、C から T へ範疇素性（‘T’）を継承した場合、T の上の範疇 α のラベルは T に決まり、C の上の範疇 γ のラベルは C に決まるが、その中間の範疇 β のラベルは決まらない。しかしながら、(30)のように、C から T へ一致素性（‘ ϕ ’）を継承した場合、 α と β のラベルは DP と T の間で形成される一致関係によって $\langle \phi, \phi \rangle$ に決まる。したがって、当該構造のラベルを「完全に」決めるためには（cf. Full Interpretation）、継承される素性は範疇素性ではなく、一致素性でなければならないということになる。

(31) なぜ言語は「不完全な」一致素性（“unvalued feature”）を持つに至ったのか？

(32) 「完全な」ラベル付けを行うため。

4. まとめ

(33) 提案システムの下では

- T のパラメータ化をなくし、T と V の特性を統一的に扱うことができる
- 空主語現象と空目的語現象に対して統一的な分析を与えることができる
- 素性継承と一致素性の存在に対して原理的な説明を与えることができる
- ミニマリストの仮説(14)(15)(16)が支持される

さらに、提案システムを仮定すると...

(34) 以下の現象も説明することができる (Goto 2016 参照)

- a. “super raising”と“quirky subject”現象で観察される英語とイタリア語の違い
- b. 英語の虚辞による“that-t effect”の消失とフランス語の“que-qui alternation”
- c. wh 移動言語 (例: 英語) と非 wh 移動言語 (例: 日本語) の違い

- (35) a. What_i did Mary buy t_i? (英語: wh 移動言語)
b. 花子が 何を 買いましたか? (日本語: 非 wh 移動言語)

(36) 花子が 何を t_i 買いました か?



日本語では Q-particle の「か」が SPEC-C に移動することによって、疑問 C の<Q, Q>ラベル (cf. Chomsky 2013, 2015) を決めることができる。ゆえに、日本語では wh 句が元位置に留まることができる (cf. Hagstrom 1998; Hasegawa 2005)

- (37) a. *What_i do you wonder [John likes t_i]?
b. 何を_i 太郎は [花子が t_i 買ったか] 知りたがっているの?

(38)

何を_j 太郎は [_α 花子が t_j t_i 買ったか] 知りたがっているの?

日本語では Q-particle の「か」によって α の<Q, Q>ラベルが保証されるため、wh 句の「何を」は“WH-Criterion”に違反することなく、さらに移動することができる (cf. (22))。

参考文献

- Chomsky, Noam. 1998. Some observations on economy in generative grammar. In *Is Best Good Enough? Optimality and Competition in Syntax*, ed. by P. Barbosa et al, 115-127. Cambridge, MA.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase. In *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2013. Problems of projection. *Lingua* 130: 33-49.
- Chomsky, Noam. 2015. Problems of projection: Extensions. In *Structures, Strategies and Beyond – Studies in Honor of Adriana Belletti*, ed. by Elisa Di Domenico, Cornelia Hamann & Simona Matteini, 3-16. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Goto, Nobu. 2016. Labeling and Parametric Variation in Syntax. Paper presented at the 34th ELSJ Workshop held at Kanazawa University (November 12, 2016).
- Hagstrom, Paul. 1998. Decomposing Questions. Doctoral dissertation. MIT.
- Hasegawa, Nobuko. 2005. The EPP Materialized First, Agree Later: Wh-Questions, Subjects and Mo ‘also’-Phrases. *Scientific Approaches to Language* 4: 33-88.
- Huang, C.-T. James. 1984. On the distribution and reference of empty pronouns. *Linguistic Inquiry* 15: 531-574.
- Matushansky, Ora. 2006. Head movement in linguistic theory. *Linguistic Inquiry* 37: 69-109.
- Richards, Marc. 2007. On feature inheritance: An argument from the phase impenetrability condition. *Linguistic Inquiry* 38: 563-572.
- Rizzi, Luigi. and Ur Shlonsky. 2007. Strategies of subject extraction. In *Interfaces + Recursion = Language? Chomsky’s Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, ed. H. M. Gärtner & U. Sauerland, 115-160. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Toyoshima, Takashi. 2001. Head-to-Spec movement. In *The Minimalist Parameter: Selected Papers from the Open Linguistics Forum, Ottawa, 12–23 March 1997*, ed. G. M. Alexandrova & O. Arnaudova, 115-136. Amsterdam: John Benjamins.